ことば
言葉
コトバ

令和のアクセント

このコラムが読まれるのは，新元号発表から3か月余り。世の中の「令和」のアクセントはどうなっているだろうか。

菅官房長官の会見で［レ＼ーワ］と，［レ］を高く言う頭高型アクセントで発表されたこともあり，会見直後，NHKはじめ放送局の多くは，頭高型で新元号を伝えた。一方，街頭インタビューなどでは［レーワ￣］と平板型で言う人もいて，2つのアクセントの混在が見られた。そのためNHKでは再検討し，「令和」のアクセントには頭高型と平板型のどちらもあり得るという方針を示した。「令和」単独で言うときには頭高型が出やすく，「令和〇年」のように後ろに年数が付くときには平板型も出やすいことが考えられるため，ひとまず両方とも使えることにして，今後の世の中の状況を見極めながら，より違和感のないアクセントを選択していくことにしたのである。

2通りのアクセントの根拠としては，まず二字漢語の音韻構造がある。二字漢語のうち「令和」（れい＋わ）のような<2拍＋1拍>の3拍語では，過去の研究で頭高型が優勢であることがわかっている。一方［レーワ￣］という平らなアクセントについては，<2拍＋1拍>の3拍の二字漢語のうち，2字目に“和”が使われている語については90％が平板型だという報告がある。加えて過去の年号のアクセントを戦後に定めた文研の資料『尊号及年号の読例』（1953）によると，「令和」同様，2字目が“和”で2拍目が伸びる音の元号はすべて平板型（応和，享和，弘和，康和，正和，昭和，承和，長和，明和，養和）となっており，「平板型優勢」の可能性も十分にある。

しかし，周囲を見る限り，「頭高型優勢」は変わる気配がない。放送を通して頭高型が刷り込まれている可能性もあろうが，平らな音調でなく，語頭の［レ］を強く高く発音する心理には，言語学的な分析では説明しきれない「新しい時代の幕開け」という高揚感が作用しているようにも思える。5年後か10年後か，「令和」に新しさを感じなくなったとき，私たちはどのようなアクセントを選択しているだろうか。まだ時代の新鮮さを保ちつつエネルギッシュに頭高型で言うもよし，美しいハーモニーがなじんで穏やかに平板型で言うもよし。いずれにしても，多様性を認める「よき時代」となるよう切に願う。

滝島雅子（たきしま まさこ）